

今
週
の
み
こ
と
ば

「クリスマスの喜び～インマヌエル（神とともにいます）～」

（イザヤ書 7 章10～14節）

「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」(7:14)。

（マタイの福音書 1 章18～23節）

『見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。）(1:23)

今日 の メ ッ セ ー ジ 要 旨

◎私たちは毎年クリスマスを迎え、お祝いしますが、その喜びは一体何にあるのでしょうか？

◎イザヤ書 7 章の背後にある歴史的イベントは、BC734年頃のアラム・エフライム戦争です。当時、アラムの王レツィンと北イスラエルの王ペカは反アッシリヤ同盟を結び、ユダのアハズ王にも加わる事を求めたが、アハズ王がこれを拒否したため、両国がユダを攻めて来たのです。その時「王の心も民の心も、林の木々が風で揺らぐように動揺した」のです。しかし、神様は「気をつけて、静かにしていなさい。恐れてはなりません。」「もしあなたがたが信じなければ、長く立つことが出来ない。」更に「あなたの神、主から、しるしを求めよ。よみの深み、或いは、上の高いところから」とアハズに告げられたのですが、アハズは「私は求めません。主を試みません」と答えたのです。これは敬虔そうで、実は不信仰な告白でした。そこで神様自ら一つの印として「処女降誕」インマヌエルの預言をされたのです。それがイエス・キリストの降誕において成就したのです。

◎イエス様の誕生の記事はマタイはヨセフの側から、ルカはマリヤの側から記されているのです。マタイの福音書 1 章では「イエス・キリスト」の系図に続き、その誕生の次第が記されています。ヨセフとマリヤは婚約中でしたが、結婚したのと同じ法的責任を負わされ、「夫」(19)と「妻」(18)と呼ばれていたのです。特に女性が婚約期間中に妊娠しますと、相手の男性と共に「石打ちの刑」に処せられるのでした。「正しい人」であったヨセフは、マリヤの妊娠を知り「さらしものにしないで内密に去らせよう」と思い巡らしていた時、「主の使い」が現れ、ことの真相をヨセフに告げたのです。

◎「胎に宿っているものは聖霊による」「マリヤは男の子を産む」「その名をイエスとつけなさい」「この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です」このすべての出来事は「主が預言者を通して言われたことが成就するためであった」と告げ、その名前は「インマヌエル（神は私たちと共におられる）」と呼ばれる(イザヤ7:14)と語られたのです。「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」と約束されています(28:20)。主を信じましょう。